

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20197

研究課題名（和文）国際移民のホームランド維持に関する研究：中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加

研究課題名（英文）A study on homeland maintenance by migration: Korean-Chinese migrants' remote commitment to mother village

研究代表者

許 燕華 (XU, YANHUA)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：50909504

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、移民と出身地関係の1つとして、家族を通じた・送金を通じた従来の関係だけでなく、直接的に出身地につながることを解明した。物理的に出身地から離れていても、移民が遠隔地参加することで出身地の制度とつながっていること、具体的には投票、各種補助金の利用、社会保険への加入などを通じて示した。

3年間の研究期間全体をとおして、新型コロナウイルス感染拡大および調査地側の入国規制の影響が原因で中国フィールドワークが実施できたのは最終年度だけだった。収集したデータは投稿論文1つと学会発表1回の形で成果をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、遠隔地参加に着目することで、移民現象のより包括的な理解に貢献することに学術的意義がある。また、生存危機が危ぶまれる重要な転換期を迎えている中国朝鮮族農村社会において、国境を越えて激しく人が移動するグローバル化社会における国際移民の行き先研究に新たな展開をもたらすことで社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research, as one of the studies on immigration and homeland relationships, clarified that immigrants are connected directly to their home countries, not just through traditional familial or remittance-based relationships. It revealed that immigrants, even when physically distant from their home countries, remain connected to their home country's institutions through perspectives of remote participation, specifically in terms of voting, utilization of various subsidies, and enrollment in social insurance.

Throughout the entire three-year research period, fieldwork could only be conducted twice in the final year due to the impact of the COVID-19 pandemic and immigration restrictions at the study sites. The collected data resulted in one submitted paper and one presentations at academic conferences.

研究分野：社会学

キーワード：移民 出身地 ホームランド コミュニティ 中国朝鮮族 遠隔地

1. 研究開始当初の背景

移民研究は、従来、移民受け入れ側の状況や視点に焦点が置かれてきたため、移民の視点や送り出し側、特に農村の分析は未だ十分な蓄積があるとはいえない。移民とホームランドの関係は、強いイデオロギー的な想像のなかのもので維持するか、送金などで支えることで関係を続けるとされるが、移民はホームランドの実際の運営には関与しない(できない)と認識されてきた。しかし、本研究でとりあげる中国の朝鮮族農村(中国朝鮮族移民にとってのホームランド)では、圧倒的多数の移民により、母村に残された労働力もほとんど存在しないにもかかわらず、移民した人々による遠隔地参加を通じて、農地がフル活用され・自治が維持されている。

既存の(送り出し側)ホームランドに関する研究は大きく2つに分けることができる。1つは、生活の場を完全に受け入れ側に定めており、数世代にわたり滞在している人々(ユダヤ人を代表的事例とするディアスポラ)にとってのホームランド研究である。ここでのホームランドはイデオロギー的な想像のなかのものである。2つは、意図的・非意図的であれ、生活の場はまだ定めておらず、定期的・非定期的に受け入れ側と送り出し側を行き来したり、場合によっては第三の場所へ移動したりする人々たちにとってのホームランド研究である。ここでのホームランドはバーチャルな「トランスナショナルなネットワーク」など抽象的なものか、あるいは海外送金・国家レベルでの政治参加など実態はあるものの移民とホームランドの関係は支える/支えられる関係である。

報告者はこれまで、移民の送り出し側がいかに維持されるのかに着目し、他地域から流入した漢族に農地を貸借することにより人手流出で荒廃した農地がフル活用へ転換したことをまとめてきた(許 2015)。報告者のこれまでの研究は、支える/支えられる視点を超え、中国朝鮮族移民がいかに直接農地と村長選挙などの村の運営に関与するのかを明らかにしてきた。しかし、中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加が今後持続するにはどのような要因の影響を受けるのかは解明されていない。本研究の問題点は、何が移民のホームランド維持の持続に影響するのかを解明することである。そこで、近年の中国の少数民族政策と農村政策の変化、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響を究明する必要性を感じた。本研究によって中国朝鮮族移民だけではなく、様々な移民のホームランド運営ひいては国際移民の行き先研究への応用などに新しい展開をもたらすものと期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、物理的に出身地を離れることで移民が出身地運営に関与しない・できないとされてきた「移民とホームランドの関係」を、遠隔地参加という視点から再検討することである。

国境を越える移民がトランスナショナルな活動を通じて移動元出身地とつながりを持つと認識されてきた今でも、物理的に移動元を離れることで現実的に家族を通じたあるいは送金を通じたつながり以外では、できることが少ないという意識が一般的である。とくに、それが具体的な農村地域の場合、出身地母村に居住しない移民へ付与されてきた従来からの権利は移民自身のなかでも重要視されず事実上休止状態にある場合が多いと認識されてきた。

本研究で取り上げる調査対象である中国朝鮮族農民の出稼ぎ移民の場合も 2010 年以前は出稼ぎによる大量の国内外への農民の流出により出身地の荒廃を招き、元の村の運営が疎かになった。しかし、2010 年以降から漢族の流入をきっかけに農村での行政・準行政における権利保護の動きが見られる(許 2015)。そこで本研究では、送金か家族を通じたつながりではない、移民と出身地との直接的なつながりはあるのか、そのつながりを可能にする制度的・社会環境的ものは何か、実際にどのように移民は直接的なつながりを通じて出身地コミュニティを維持しているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

中国の一少数民族である中国朝鮮族の現代移民に対する聞き取り調査、観察調査を行う。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大及びオミクロン株の出現による調査地入国制限などの影響のため、当初の計画を見直し、1年目は資料収集とインタネットインタビューを、2年目は夏は日本で調査を行った。主に東京の中国朝鮮族飲食店の経営者と利用者に対してインタビュー調査、埼玉県川口市の外国人集中居住団地での参与観察及び元住民・周辺地域の中国人住民に対するインタビュー調査を行った。冬は韓国における中国朝鮮族に対する調査を行った。主にソウルと京畿道の中国朝鮮族移民に対するインタビュー調査、2つのチャイナタウンで参与観察を行った。2年目は、日本と韓国の調査とも主に移民の生活状況、故郷との関係、新型コロナウイルス感染拡大の影響を調べた。3年目の2023年度によりややく本格的な中国での調査が可能になり、夏と冬2回にわたって調査を行うことができた。2回の調査とも主に移民の生活状況、故郷との関係、新型コロナウイルス感染拡大の影響について調べたが、冬の調査では延辺の観光化現

象（夏調査で収集した情報をもとに）についても調べた。

4．研究成果

本研究は、物理的に出身地を離れることで移民が出身地運営に関与しない・できないとされてきた「移民とホームランドの関係」を、遠隔地参加という視点から再検討するものである。移民研究のなかでのホームランドは、イデオロギー的な想像のなかのもので維持するか、送金などで支えることで関係を続けるとされてきた。さらに、他者を受容し活用することで人手不足を補いコミュニティを再編しながら維持するという研究も行われている。本研究では、他者を受容し活用するだけでは補えない部分を、遠隔地参加の視点、具体的には投票、各種補助金の利用、社会保険への加入という三つの面を分析することで、移民は物理的に出身地を離れていても出身地の制度と切り離されているわけではないことを明らかにした。

日本国内での移民とくに中国朝鮮族の移民に対する調査と、韓国における中国朝鮮族移民に対する調査を通じ、移民と故郷との関係およびその変化を探ることができた。また、2回の中国調査を通じ、移民と送出しホームランドの間で存在する様々な関係性を明らかにすることができた。

日本と韓国での移民と故郷の関係に関する調査および中国の移民輸出側での2回の調査を通じ、とくに家族・親族などの親密圏とは異なる関係性に注目し、『哲学論集』第70号に論文として投稿し2024年2月に掲載された。投稿した論文ではおもに以下のことを明らかにした。従来の研究では、2000年代以降親密圏に着目した移民のトランスナショナル研究が進展をみせ、家族など親密な関係性を介して移動が生み出されることが解明された。また、移民から送られる送金で、残された家族が教育や健康へのアクセスをかなえ、農地購入や現存資産と生活の改善を可能にし、コミュニティ全体が経済的な面で変容することも明らかになった。しかし、これらの研究では移民からの送金および与えた影響を明らかにしたものの、移民送出後のコミュニティの維持メカニズムそのものに対する議論は行われていなかった。これに対して報告者は、移民送出後のコミュニティが送金以外で新たに他地域から流入してきた漢民族を条件付きで暫定的に受容することで、農地・行政・準行政・社会組織・民族関係において他者を受容し活用することでコミュニティを再編していることを明らかにした（許2015）。2024年の投稿論文では、上述の先行研究を踏まえて、他者を取り入れることではどうしても解決できない部分として、移民と移民送出後のコミュニティはどのようにしているのかを解明した。具体的には、遠隔地参加の視点から、投票、各種補助金利用、社会保険の加入の3点から、移民は物理的に出身地を離れていても出身地の制度と切り離されているわけではなく、遠隔地でありながら制度とかかわりを持ち、出身地と制度の間で関係性を再編し、コミュニティを維持していることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 許 燕華	4. 巻 第70号
2. 論文標題 移民と出身地のつながり - 親密圏と異なる関係性の諸相	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 哲学論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 許 燕華
2. 発表標題 国際移民の行き先に関する社会学的考察 - 中国朝鮮族移民とホームランド母村の関係性から
3. 学会等名 日本における中国朝鮮族研究者・知識人ネットワーク研究会 若手研究者関西地域報告会（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------